

広汎性発達障害児の乳幼児期における母子関係についての事例研究

－母子関係を通して療育が果たす役割を考える－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
本田 浩子

本研究では、広汎性発達障害（以下 PDD）児の母親を対象に半構造化面接を行い、母親から見た PDD 児における対人関係性の変容を、事例的に明らかにすること、またその変容が療育にどのような影響を与えているのかを検討することを目的とした。

母親へのインタビューとグループ療育の観察記録を分析対象とした。インタビューは、対象児ごとに時系列に集約し、それぞれの事例を、1 期（障害に気がつかない時期）、2 期（障害に気づく時期）、3 期（子どもの変化に気づく時期）、4 期（子どもの成長への喜び）に分類し、観察記録と合わせて分析を行った。

結果、母子関係における大きな特徴は、子どもがどのように母親と情動交流をすればよいか理解するのが困難であり、母子相互交渉の成立を難しくしていたことであった。このような困難な状況の中、母親たちはどうにか子どもと関わる方法はないかと模索し、努力を重ねて、徐々に子どもたちとの共有体験を増やしていった。その過程で、母親たちは、自責的になり、諦めなど気持ちの落ち込みが見られたが、気持ちを切り替え、子どもたちと向き合うようになっていった。また、母親の気持ちの揺れを、子どもも敏感に感じ取っていたことが分かった。PDD 児は、母親や養育者など、よく知っている他者の気持ちや態度には、子どもたちなりの反応で敏感に応じていたと言える。

このような母子関係から、療育の果たす役割を考えると、療育との関係において母親が信頼する機関として共通する条件は、一人一人の子どもをしっかりと捉えること、理論や専門知識の押しつけでなく子ども個人の特性に合わせる柔軟性があること、子どもにとって楽しい体験であること、母親への支援が含まれていることであった。

PDD 児たちは、感情の表出が乏しいといわれるなど、母親にとっては「分かりにくい」存在である。母親の「子どもの気持ちが知りたい」という思いからも、母親は子どもを分かろうとしていることは明確である。また、「分かりやすくなる」ことで、母親の関わりも増えることは本研究からもうかがえる。つまり、子どもたちの「分かりやすさ」は、母親にとっては、ある意味子どもたちが「成長」しているバロメーターだと考えられる。

母親への支援は、まず、療育という「他者」の存在によって、母親が自信を失ってしまうことを避ける必要がある。母親は、子どもの反応や行動によって大きく気持ちが揺り動かされるが、それを安定させることで、母子関係の安定にもつながると言える。特に母子関係が形成される幼児期には、子どもが療育の場で他者との情緒的相互交流を体験できることと平行して、母親が子どもと情動的な関係を築くために支援を行うことが重要であると考える。